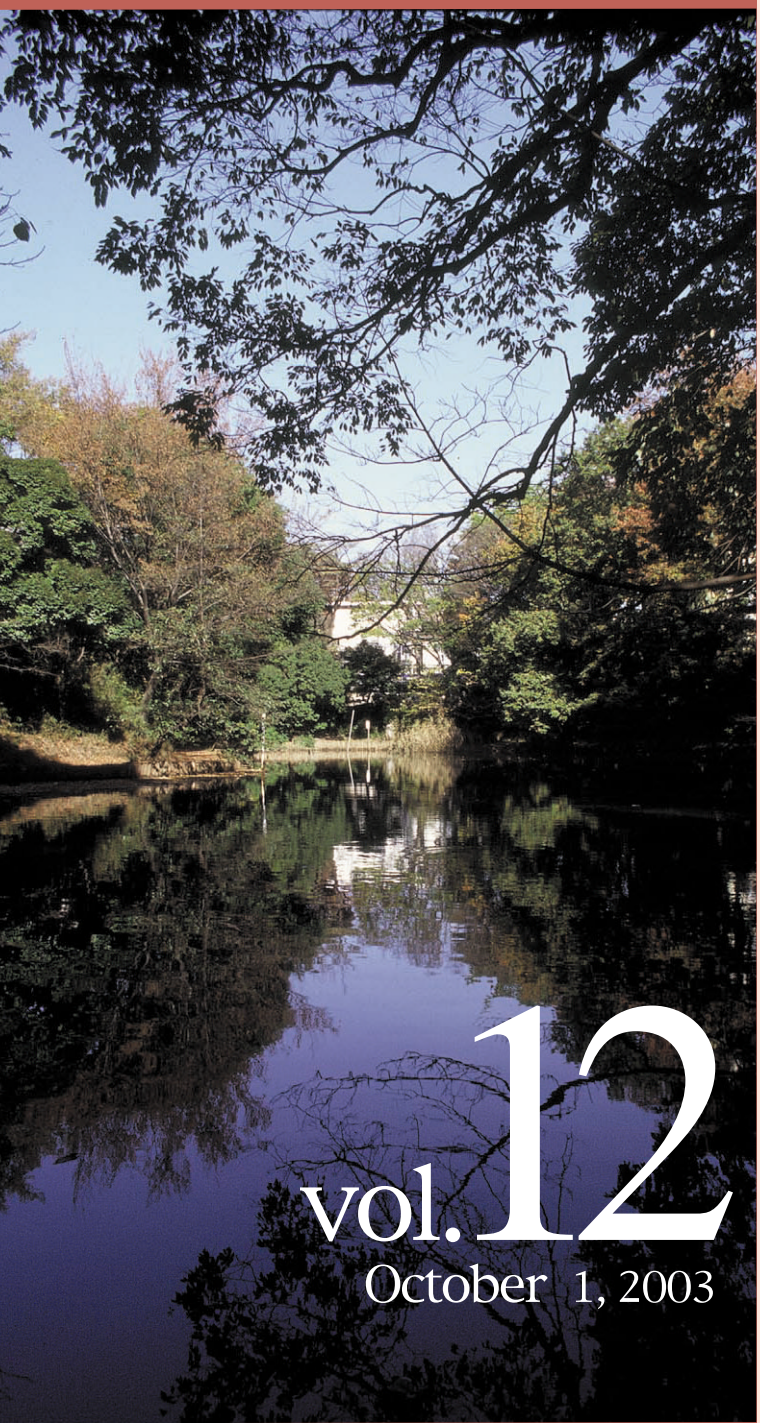
学習院大学
国際交流センター
Centre for International Exchange
News Letter



vol.12
October 1, 2003

オーストラリアに2校目、アイスランドには初めての協定校が誕生！

本学はこのたび、ニューサウスウェールズ大学（オーストラリア）およびアイスランド大学（アイスランド）とそれぞれ大学間協定を締結しました。

ニューサウスウェールズ大学は、内容・規模ともにオーストラリアを代表する大学の一つで、コースは600以上、在学生は４万人を超え、斬新かつ独創的な教育・研究姿勢も高く評価されています。また優秀な卒業生を多く輩出することでも有名です。早くから国際交流にも力を注ぎ、200以上の機関と協定を締結し、約9,000人いる留学生の国籍は90カ国以上に渡ります。大都市シドニーにある広大なキャンパスは、地の利が良いだけでなく、施設も充実しており、理想的な環境を提供しています。

【ニューサウスウェールズ大学の概要】
❶創　立：1949 年
❷所在地：オーストラリア シドニー市
❸学生数：約 40,000 人（うち留学生約 9,000 人）
❹学　部：Arts & Social Sciences, Built Environment, College of Fine Arts, Commerce & Economics, Engineering, Law, Medicine, Science, Australian Graduate School of Management, Australian Defense Force Academy

アイスランド大学は、創立以来、国立大学として国内の教育水準の維持に努め、また世界各国からの優秀な研究者招聘の拠点となるなど、国家発展の中心的な役割を担ってきました。現在では、11学部で60程度のプログラムが用意されています。国際交流も非常に活発で、約400人の留学生が在籍し、アイスランド語で行われている通常の授業の他、交換留学生向けに英語による講義も多数開設されています。研究者レベルの交流も盛んに行なわれ、joint projectにも積極的に参加しています。

▲調印式にて［左端が Skúlason アイスランド大学長、その右隣りが塩谷所長］

【アイスランド大学の概要】
❶創　立：1911 年
❷所在地：アイスランド　レイキャビーク市
❸学生数：約 8,000 人（うち留学生約 400 人）
❹学　部：Economics & Business Administration, Engineering, Humanities, Law, Medicine, Nursing, Odontology, Pharmacy, Science, Social Sciences, Theology

バイロイト大学（ドイツ）とは学科間協定から大学間協定へ

本学は、今年５月、ドイツのバイロイト大学と大学間協定を締結しました。

この協定は、1989年９月28日に調印された、本学文学部ドイツ文学科とバイロイト大学国際文化交流学科の学科間協定を基に、更なる交流の拡大を目指して締結されたものです。バイロイト大学は音楽祭で有名なバイロイト市の郊外に位置し、少人数制の講義を中心とした快適な学習環境を提供するのみならず、図書館や計算機センターなどの施設も充実しています。また、学生寮もキャンパス内に設置され、スポーツも盛んに行われています。

【バイロイト大学の概要】
❶創　立：1975 年
❷所在地：ドイツ　バイロイト市
❸学生数：約 8,000 人
❹学　部：Mathematics and Physics, Biology, Chemistry and Earth Sciences, Law and Economics, Linguistics and Literatures, Cultural Studies, Applied Sciences

協定留学プログラム
派遣学生体験記

平成10年度から始まった協定留学プログラムも今年で6年目を迎え、これまで派遣した学生数も50名を超えるまでになりました。今回は、イギリスが世界に誇る名門校の一つであるオックスフォード大学で学んだ田中君に体験記を書いてもらいました。英国最古の大学でのキャンパスライフはどのようなものだったのでしょうか？

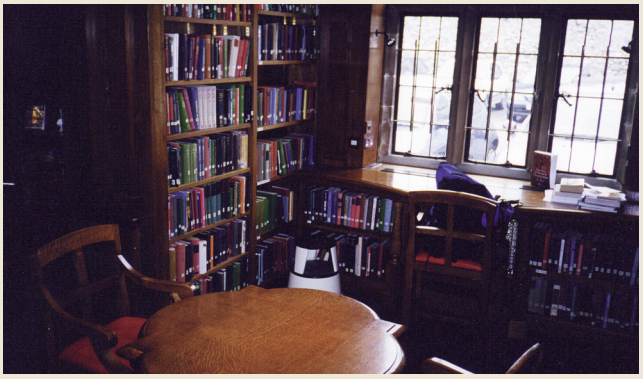
留学報告

平成14年度オックスフォード大学マートン・カレッジ派遣学生
法学部政治学科4年

田中　力

私が1年間留学したマートンカレッジはロンドンから西へバスでおよそ1時間半ほどかかるオクスフォードにある。マートンカレッジはオクスフォード大学に「所属する」カレッジの一つで1264年に設立されたオクスフォード大学のなかでも最も古いカレッジの一つである。「所属する」と書いたが、これがオクスフォード大学（University）とカレッジ（College）の関係を表す正確な言葉かどうかはわからない。というのも、オクスフォード大学の学生は必ず一つのカレッジの学生でもあり、どのカレッジにも所属していない者はオクスフォード大生とは言えず、このようなUniversityとCollegeの関係が如何なる理由で、またどのような経緯でこのような仕組みになり、そもそもこの仕組みがどのように機能するのか、といったことについては今でも私はよくわからないからである。カレッジは食事と部屋を提供してくれ、図書館もあるので、生活の中心はカレッジにあった。生徒が専攻する学科によってカレッジが決まるというわけではない。マートンカレッジには歴史学科の学生も、ラテン語・古代ギリシア語の文学を勉強する古典学科、また数学科、医学科の学生もいた。この学際性が「カレッジ制」の良いところだ、と言ったのはハーバード大学を卒業して英文学を研究しにやって来たアメリカ人の学生だった。アメリカの大学では、やはり学科ごとに生徒が固まり、同じ学科の中でしか友人が出来ない様だ。同じことが学習院大学について言えるかも知れない。それがカレッジ制によるものなのかもしれないが、確かにこの学際性は私も痛感した。食堂で食事をとるとき、大抵私の隣に座っていたのは同学年の歴史学科の学生と古典学科の1年生、前に座っていたのが理論物理を研究していた大学院生で斜め前にはPPE(Philosophy, Politics & Economics)科の2年生が座っていた。食事ではよく今勉強していることや書いている小論文（オクスフォードでは毎週一本、かわいそうな学生は二本書かされる）についてよく尋ねられたし、こちらも色々質問していた。これは大変勉強になった。自分が勉強している専門的なことを違った専門分野を勉強している人に説明することは難しい。しかし、これは自分の理解を確固としたものにする良い方法でもある。また書いている小論文について話していると、時に相手が新鮮な視点を提供してくれることもあった。これは小論文を書いていて行き詰まった時に助けとなった。こう書くと、図書館から抜け出し、一息つく筈の食事の時間にも関わらず、如何にも知的な会話ばかりが為されていたという印象を与えるかもしれないが、勿論、食事をしながらイギリスの飯はやっぱりまずいだの、いや意外にうまいだの、そもそも何で夕飯はいつもこんなに貧弱なんだとか（夕飯だけは量がやけに少なく、夜中腹が減って中々寝付けないこともあった）、そういったたわいない話も沢山した。

▼マートンカレッジの図書館



◀ボート部の仲間と
Blenheim Palace
（Churchillの生家）にて
［左端が田中君］

小論文の話が出たので、オクスフォードでの勉強生活について書こうと思う。オクスフォードでの教育の柱は講義ではなく、「チュートリアル」と呼ばれるもので、所謂教授や博士による個人、或は少人数、指導である。つまり、私の場合、週に一度教授の研究室に行き、前週に課された質問に答えるために書いた小論文を読み上げ、これについて教授と話し合うというものだ。（例えば、私が最初に書いた小論文は『どこまで欧州列強はウィーン会議（1814－15）において勢力均衡を打ち立てることができたか？』という質問に答えたものだった。質問にはたった一つの正しい解というものはない。自分でつくるのだ。）質問に答えるための議論を展開するには情報が必要である。教授は毎週、質問に答える上で読むべき書籍を5～7冊ほど挙げてくれた。これには当初実に参った。全て読むとしたら一日一冊のペースである。小論文を書く時間を考慮するとこれよりさらに早いペースで読まなくてはならない。7冊全てが日本の新書だったら何とかなるかも知れない。だが挙げられる文献は皆ちゃんとした専門書である。「これこそオクスフォード！」とやってみたもののやはり駄目で、教授に「全てを読むのは物理的に不可能でした」と泣き言を言ったら、「当たり前」と言われ、この教育システムでの勉強方法というものを教わった。所謂「コツ」というものだが、「コツ」は習得するまで時間がかかり、それまで大変なことにはかわりはない。楽をするためにここに来たわけではない、と自分を奮い立たせたが、根性なしの私にはやはり辛かった。講義も勿論あった。出席するものはチュートリアルでの指導教官（tutor）と相談して自分が決める。生徒は講義を聞いて、チュートリアルのための小論文を書く上で参考にする。そして、講義を聞くことによって生徒は自分が勉強している内容をもっと広い文脈におく事が出来、同時にその内容を整理する。美術館のような講義館で、幾人かの素晴らしく魅力的な教授の講義を受講できたのは、私の大切な経験の一つである。

話はチュートリアルに戻る。あくまでチュートリアルが、そしてチュートリアルにおける話し合いと議論（そしてその前提となる読書と小論文作成！）が、オクスフォードでの教育の柱なのだが、しかし私が戸惑ったのはまさにこの教授との議論だった。初回のチュートリアルで早速私の担当教官であった19世紀欧州史、特にフランス史を専門とされるロバート・ギルデー教授に「知識の少ない学生が圧倒的に知識の多い教授と議論が出来るのか」と聞いた。ギルデー教授は、チュートリアルの目的は勉強している内容についての生徒の理解を深め、より良い小論文を次回生徒が書けるようにすることだ、と説明してくれた。つまり、生徒は教授を議論でやっつけることを求められているわけではなく、あくまで生徒の学力の向上がそこでは目指されているということだ。

読むべき書籍の多さと勉強するには素晴らしい環境から、そこにいる学生は四六時中勉強していると思われるかも知れない。しかし行ってみると、皆が朝から夜中まで勉強しているというわけではなかった。少なくとも、図書館ではそういった学生を見掛けなかった。図書館でよく一緒になった同じ歴史学科の友人は朝食をとって9時半頃から昼食をはさんで5時まで勉強し、夜は友人と出掛けて遊ぶ、という生活を大抵送っていたが、そういった彼が「よく勉強する学生」という評判を皆から得ていた。またオクスフォード大生だからといって皆立派な人間というわけではなく、図書館内で携帯電話で話す学生もいたし、大きな声で笑いながら友人と喋っている学生もいた。

こういったことは世界共通のことなのかもしれない。図書館で規則を守らぬ輩が幾らかいたものの、やはり図書館それ自体は素晴らしかった。勉強にうんざりして集中出来なくなると、よく本棚を眺めて、面白そうな本を見つけては借りて、自分の部屋に持ちかえっていた。このように、仲間との刺激的な会話、チュートリアルという教育システム、魅力的な教授たち、素晴らしい図書館、オクスフォードは私にとって勉強するのに素晴らしい環境であった。

人に「オクスフォードではなにをやってきましたか」と聞かれたら、私は「勉強してきました」と答える。3学期あるなかで第1学期、第3学期にボート部に入りボートを漕いだという素晴らしい思い出もあるが、それも身体を動かせば、勉強がもっと捗るかもしれない、というつもりで始めたものだった。そして、何より図書館で過ごした時間が一番長い。それが私の留学の目的でもあったから、そう答えるしかない。図書館のにおいを嗅ぎ、その雰囲気を肌で感じて帰ってきた今、オクスフォードが恋しい。「折角イギリスに行ったのにそんな図書館に籠って。もったいない。」という人がいるかもしれない。そうなのかもしれない。しかし、「あれは自分の人生にとって決定的な一年だった」と振り返る日が来るかもしれない。それはこれから私がどう生きるかに左右される。私の留学は終わったどころか、寧ろこれからであるように思う。

TOEFLの申し込みについて

オンラインによりTOEFLが申し込めるようになりました。下記のURLにアクセスの上、指定の手順に従って申し込んでください。

http://www.prometric-jp.com（24時間、毎日受付）

受付は、受験希望日の３営業日前まで、受験料の支払い方法は、VISA、MasterCard、American Express、いずれかのクレジットカードに限ります。

なお、国際交流センターでの、募集要項（TOEFL Information Bulletin）の配布は終了しました。下記のURLからダウンロードできます。

http://www.toefl.org/pubs/dnldbltn.html

短期語学研修体験記

語学研修 inオーストラリア

法学部政治学科２年
佐藤晶彦

長期留学はちょっと、と思っていても、夏休みや春休みを利用しての短期語学研修には行ってみたい、という学生さんが多いのではないでしょうか。今年の春休みに、オーストラリアへの語学研修を実現させた佐藤君に体験記を書いてもらいました。ぜひ参考にしてください。

◀友人の誕生日パーティーにて［左端が佐藤君］

オーストラリアの首都キャンベラにあるANUTECHという語学学校に今年の２月上旬から３月中旬までの６週間（うち５週間は語学学校）留学をしました。なぜこの語学学校を選んだかというと、日本が冬のときオセアニア地域は夏である、親日家が多い、そしてオーストラリアの大学に留学したいと思っていたからでした。

事前の準備は、海外の語学学校が検索できるサイトで自分の条件に当てはまる学校をいくつか探し、パンフレットなどを送ってもらって、その中から決めました。連絡は日本語で通じたので大変助かりました。ホームステイ先も、自分の要望を伝えてから語学学校が用意してくれました。

学校の初日はプレイスメントテストを行い、クラス分けをし、私はintermediateという中級のクラスに入りました。その後の５週間の授業時間割は下の表の通りです。授業の内容は、先生も生徒の関心や要望に出来るだけそって、時には教科書から離れることもありました。クラスの雰囲気もコーヒーなどを飲みながらリラックスでき、生徒同士が話しやすいように心がけていたように思えます。先生は英語教授の高等教育を受けているので、質の高い授業を受けることができたように思います。今回の留学で、Writingの力を伸ばしたかったので、宿題以外にエッセイを書いて、担任の先生に添削をしてもらいました。作文の添削以外にも、発音や会話についても指導をしてもらいました。自分から要求すれば、喜んで丁寧に教えてくれます。学校の生徒はアジア人が多く、15人いるクラスの中で、中国人５人、韓国人３人、タイ人２人という比率でした。他の地域からは東南アジア、中東、南米からの留学生でした。大学付属の語学学校であったので、大学に入って勉強したいという生徒がほとんどで、とてもアカデミックな雰囲気で勉強できました。

実際に１ヵ月半行って英語を話せるようになったかというと、そうでもありません。しかし、英語を話すことの恥ずかしさや戸惑いがなくなり、帰ってからは自分が英語の何を勉強すればよいのかがわかってきた気がします。難しい新聞記事などよりも簡単な日常単語や会話フレーズをもっと勉強しておけばよかったと思うことが多くありました。この後悔が日本に帰ってからの英語の勉強の励みになりました。アジアの友達が多くできたことによって、帰国後は海外のニュースに注目するようにもなりました。またEメールで連絡を取り合うことによって、英語の勉強にもなっています。短期語学留学をただの旅行の延長上にしないためにも、日本に帰ってから英語とどう接していくかが重要です。

肝心の費用ですが、飛行機代13万円、授業料12万円、滞在費５万円ぐらいかかり、必要経費だけで30万近くかかりました。40万から50万あれば、遊ぶ分などのお小遣いもふくめて行ってこられると思います。日本の旅行会社が企画しているものよりかは手間と費用がかかりましたが、日本人が少なかったという点がよかったです。そして自分で好きなようにできたというのが利点でした。

Time/Day	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
9.00am - 11.00am	Textbook	Textbook	Textbook	Writing	Text
11.00am - 11.30am	Break	Break	Break	Break	Break
11.30am - 12.30pm	Speaking	Self-Study	Video	Self-Study	Pronunciation
12.30pm - 1.30pm	Lunch	Lunch	Lunch	Lunch	Lunch
1.30pm - 4.00pm	Grammar	Reading	Free	Textbook	Listening/ Conversation

平成16年度協定留学プログラム派遣学生の募集

現在、国際交流センターでは、平成16年度協定留学プログラムによる派遣学生の募集を行っています。詳細は募集要項をご覧ください。募集要項は国際交流センターで配布しています。あなたもチャレンジしてみませんか？

●平成15年度協定留学プログラム派遣学生

復旦大学（中国）
- 政治学科３年　安田　貴洋
- 史学科３年　棟方　克
- 日本語日本文学科４年　古渡　健志

慶北大学校（韓国）
- 人文研（史学専攻）M２年　島　暁彦
- 人文研（日本語日本文学専攻）M２年　石塚　健

オーストラリア国立大学（オーストラリア）
- 英米文学科４年　益永　絵理

ノースカロライナ州立大学シャーロット校（アメリカ）
- 政治学科２年　宇都宮　亜沙子

エディンバラ大学（イギリス）
- 経営学科２年　高橋　伸佳

ヨーク大学（イギリス）
- 英米文学科２年　中川　祐実
- 心理学科２年　阿南　恵利奈

マンハイム大学（ドイツ）
- 経営研M２年　下元　智明
- ドイツ文学科３年　福田　緑

バイロイト大学（ドイツ）
- ドイツ文学科３年　池田　厚子

国際交流センターからのお知らせ

■国際交流センターの移転について

国際交流センターは８月、西５号館４階の就職部跡へ移転しました。本部棟への移転により来室しやすくなっただけでなく、閲覧室も以前より広くなり、ゆっくり資料を見ることができます。ぜひ、新しくなった国際交流センターにお立ち寄りください。

■国際交流センターボランティア登録情報について

国際交流センターでは、毎月１～２回程度ボランティアの皆さん宛てにEメールをお送りし、センター主催のイベント（ランチタイム交流会等）や閉室日等の案内を行なっています。

最近、こちらから送信したメールが、アドレス変更によりエラーになって戻ってくるというケースが多く見受けられます。センターに登録した情報（特にメールアドレス）に変更があった場合には、早めにご連絡ください。

学習院大学海外留学奨学金の募集

本学では、留学費用を援助し、できるだけ多くの皆さんが留学のチャンスを得ることができるように、奨学金制度を設けています。平成15年度の募集は終了しました。平成16年度第１回目の募集については、現在、国際交流センターで募集要項を配布しています。

応募条件：「留学願」により許可された留学であること。
募集人数：１２名
奨学金額：１人５０万円（給付）
応募締切：１２月初旬（募集要項でご確認ください。）

平成15年度の奨学生は以下のとおりです。（　）内は留学先国

経営研 M２年	下元　智明	（独）
政治学科２年	藤本　太郎	（英）
経済学科４年	田中　壮伶	（伊）
経済学科３年	石川　丈二	（中）
経営学科３年	石川　久洋子	（英）
史学科３年	棟方　克	（中）
英米文学科３年	平城　由紀	（英）
英米文学科３年	平松　友美	（米）
英米文学科３年	安永　智子	（英）
英米文学科２年	中川　祐実	（英）
心理学科２年	阿南　恵利奈	（英）
心理学科２年	和泉　雄介	（米）

大学院学生の国外における研究発表援助の募集

平成15年度第２回目の募集を下記のとおり行います。今年度、初めて応募する大学院学生の方だけではなく、すでに援助金を受けている方でも、異なる研究集会で発表を行う場合には応募することができます。募集要項は国際交流センターで配布しています。

応募条件：国外における研究集会で発表を行う者
募集人数：８名程度
援助金額：１人１０万円を限度として渡航費用の一部または全額
応募締切：１１月下旬（募集要項でご確認ください。）

News Letter vol.12

October 1, 2003

発行日／2003年10月1日
編集・発行／学習院大学国際交流センター

〒171-8588　東京都豊島区目白1-5-1
TEL.03-5992-1024　FAX.03-5992-1025
http://www.gakushuin.ac.jp/univ/cie/index.html

●編集後記●　８月、ついに国際交流センターが西５号館４階へ移転しました。真夏の引越作業ということで覚悟はしていましたが、冷夏のお陰で助かりました。これまでの独立したセンターから、オープンスペースへの移転となったことで、以前より閲覧室も広々とし、思ったよりも明るいセンターになりました。今まで以上に親しみのあるセンターを目指してがんばりたいと思いますので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

[平成１５年度国際交流センター運営委員]
所　　長……塩谷　清人　（文学部）
運営委員……井上　寿一　（法学部）
BROWN, Phillip　（経済学部・外国語教育研究センター）
長嶋　善郎　（文学部）
芳賀　達也　（理学部）
有川　治男　（教務部長・文学部）
遠藤　久夫　（学生部長・経済学部）